

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

■ 2023年8月30日(水) 13:50 ~ 15:50 | 血 RY303 良心館3階 R Y 3 0 3 番教室

スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

本シンポジウムは「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」といった上位課題の最終年（3年目）の企画である。今年度は「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」と題して国内外で見られる社会的な不平等をテーマにして議論を進めていく。その際、2つの視点を踏まえながら議論をしていく予定である。1つ目は、社会的に存在する種々の不平等に対して「スポーツを通して」一定の解決や是正を探ろうとする視点である。ここでは、スポーツが社会問題を解決するための手段としての位置づけになる。2つ目は、スポーツ事象の中で生じている不平等を解決ないしは是正していく視点である。この2つの視点は対立するものではなく、視点と視点との間に様々な事例が見られている。ここでは、こうした事例の紹介・議論を通じて、本テーマである「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」に迫っていく。なお、今回主に取り上げる事例としては、「先住民」「移民」「障害者」等である。また、本シンポジウムでは、国内外での調査を通じて、多数の事例に精通されている3名の研究者を招聘しており、会場の皆様と共に深い議論ができればと考えている。

[スポーツ文化-SA-1] オーストラリアにおけるスポーツと不平等～葛藤と止揚

*尾崎 正峰¹ (1. 放送大学東京多摩学習センター)

[スポーツ文化-SA-2] 日系ペルー人のスポーツ・ネットワークにみる不平等と可能性

*植田 俊¹ (1. 東海大学)

[スポーツ文化-SA-3] 障害者スポーツを通じた国際協力の動向

期待と課題

*遠藤 華英¹ (1. 同志社大学スポーツ健康科学部)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2023年8月30日(水) 13:50 ～ 15:50 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本シンポジウムは「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」といった上位課題の最終年（3年目）の企画である。今年度は「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」と題して国内外で見られる社会的な不平等をテーマにして議論を進めていく。その際、2つの視点を踏まえながら議論をしていく予定である。1つ目は、社会的に存在する種々の不平等に対して「スポーツを通して」一定の解決や是正を探ろうとする視点である。ここでは、スポーツが社会問題を解決するための手段としての位置づけになる。2つ目は、スポーツ事象の中で生じている不平等を解決ないしは是正していく視点である。この2つの視点は対立するものではなく、視点と視点との間に様々な事例が見られている。ここでは、こうした事例の紹介・議論を通じて、本テーマである「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」に迫っていく。なお、今回主に取り上げる事例としては、「先住民」「移民」「障害者」等である。また、本シンポジウムでは、国内外での調査を通じて、多数の事例に精通されている3名の研究者を招聘しており、会場の皆様と共に深い議論ができればと考えている。

[スポーツ文化-SA-1] オーストラリアにおけるスポーツと不平等～葛藤と止揚

*尾崎 正峰¹ (1. 放送大学東京多摩学習センター)

＜演者略歴＞

一橋大学、同大大学院を経て一橋大学大学院社会学研究科教授。現在、一橋大学名誉教授、放送大学東京多摩学習センター所長・特任教授。研究テーマは、スポーツ政策（とくに、人々のスポーツ参加に関する政策）、地域のスポーツ実践、オーストラリアの社会とスポーツ。

オーストラリアの社会には「主流」のアングロ＝ケルティック系の人々と移民や先住民との間に不平等が長く、そして根深く横たわっていたが、1970年代、政治主導で「白豪主義」から多文化主義に舵を切った。その後の道のりは決して平坦ではなかったとはいえ、現在に至るまでの彼の地の経験は今後への示唆を多く含んでいる。では、オーストラリアのスポーツは不平等にどのように向き合ってきたのだろうか。結論的に言えば、社会と同様に跛行的な道筋をたどり、かつ社会の動きに同期するばかりではなく時に逆のベクトルを示すことすらあった。本報告では、相互扶助の基盤としての移民コミュニティ、その場でのスポーツ活動が民族アイデンティティの拠り所であったが、そのことが「移民のスポーツ」としてサッカーが色眼鏡で見られる一因となったこと。オーストラリアン・フットボール・リーグの競技の場で人々の差別意識とその対抗が可視化され差別禁止条項の制定につながった事例などを取り上げる予定である。社会の不平等に対してスポーツではできないこと、スポーツだからこそ可能なこと。両者を截然と切り分けることは難しいが、その割り切れなさをも含み込んだ議論としたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2023年8月30日(水) 13:50 ～ 15:50 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本シンポジウムは「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」といった上位課題の最終年（3年目）の企画である。今年度は「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」と題して国内外で見られる社会的な不平等をテーマにして議論を進めていく。その際、2つの視点を踏まえながら議論をしていく予定である。1つ目は、社会的に存在する種々の不平等に対して「スポーツを通して」一定の解決や是正を探ろうとする視点である。ここでは、スポーツが社会問題を解決するための手段としての位置づけになる。2つ目は、スポーツ事象の中で生じている不平等を解決ないしは是正していく視点である。この2つの視点は対立するものではなく、視点と視点との間に様々な事例が見られている。ここでは、こうした事例の紹介・議論を通じて、本テーマである「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」に迫っていく。なお、今回主に取り上げる事例としては、「先住民」「移民」「障害者」等である。また、本シンポジウムでは、国内外での調査を通じて、多数の事例に精通されている3名の研究者を招聘しており、会場の皆様と共に深い議論ができればと考えている。

[スポーツ文化-SA-2]日系ペルー人のスポーツ・ネットワークにみる不平等と可能性

*植田 俊¹ (1. 東海大学)

<演者略歴>

横浜国立大学、筑波大学大学院を経て、現在、東海大学国際文化学部講師。専門はスポーツ社会学。近年の主な研究テーマは「エスニシティとスポーツ」（スポーツを通じた日系南米人のネットワーク形成）と「視覚障害者のスポーツ」（ブラインドマラソンにみる障害者―健常者関係）。

「定住者」という在留資格が新たに設けられた1990年の入管法改正以後、現在に至るまでいわゆる「日系人」の南米からの移入が続いている。来日の目的が、移入現象が見られ始めた当初の「帰国を前提とした短期的労働」（＝出稼ぎ）から次第に「日本での長期的滞在・定住」へと変化する中で、日系南米人たちが日本での生活において直面する問題もまた変化してきた。中でも、日本における調整弁的労働力としての構造的な位置づけと、所帯をかまえ家族を養育するために「日本の生活」に同期を図り安定化させていかなければならないことと、いつか実現するかもしれない母国への帰還のために文化的・言語的な備えをもしなければならないという、相矛盾する複数の生活課題の調停は、彼らにとって重要な問題として定位し続けている。本報告では、この問題に対して同じサッカーチームのファンであることを共通項としてサークルを全国各地で形成し、それぞれをネットワークでつなぎ合わせることで対処している日系ペルー人たちの事例を取り上げる予定である。当該実践の背景にあって彼らが日本での生活において直面している問題を浮き彫りにしつつ、スポーツがもつ意味について議論したい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会 | 【課題A】 グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか

スポーツ文化研究部会【課題 A】 テーマ別シンポジウム／スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？

コーディネーター：近藤 智靖（日本体育大学）、山崎 史恵（新潟医療福祉大学）

2023年8月30日(水) 13:50 ～ 15:50 RY303 (良心館3階 R Y 3 0 3 番教室)

本シンポジウムは「グローバル課題の解決に向けてスポーツから何が提案できるか」といった上位課題の最終年（3年目）の企画である。今年度は「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」と題して国内外で見られる社会的な不平等をテーマにして議論を進めていく。その際、2つの視点を踏まえながら議論をしていく予定である。1つ目は、社会的に存在する種々の不平等に対して「スポーツを通して」一定の解決や是正を探ろうとする視点である。ここでは、スポーツが社会問題を解決するための手段としての位置づけになる。2つ目は、スポーツ事象の中で生じている不平等を解決ないしは是正していく視点である。この2つの視点は対立するものではなく、視点と視点との間に様々な事例が見られている。ここでは、こうした事例の紹介・議論を通じて、本テーマである「スポーツを通じて社会的な不平等を是正できるか？」に迫っていく。なお、今回主に取り上げる事例としては、「先住民」「移民」「障害者」等である。また、本シンポジウムでは、国内外での調査を通じて、多数の事例に精通されている3名の研究者を招聘しており、会場の皆様と共に深い議論ができればと考えている。

[スポーツ文化-SA-3]障害者スポーツを通じた国際協力の動向

期待と課題

*遠藤 華英¹ (1. 同志社大学スポーツ健康科学部)

<演者略歴>

早稲田大学スポーツ科学研究科博士後期課程修了後、現職に至る。日本財団パラスポーツサポートセンター・パラリンピック研究会研究員を兼職。研究テーマは、スポーツを通じた国際開発、スポーツ政策。

近年、国際社会として「障害」の問題を捉え、障害者の選択肢拡大と権利向上が目指されている。障害者差別を禁ずる法律や条約の制定など、各国における障害に関する権利保障制度の進展に影響を受け、障害者スポーツも福祉政策からスポーツ政策への移管が進められている。現在では先進諸国のみならず、東南アジアやアフリカ地域など一部の途上国地域においても障害・非障害問わずスポーツ政策として公的サポートを得られるような体制整備が進められている。この政策的な変化を後押しするために、競技団体や各国政府、NGOらによって途上国地域に対する障害者スポーツに関する国際協力事業も行われている。パラリンピックなど障害者スポーツ国際大会の参加国・地域数の増加している一方、特に後発開発途上国にとっては国際大会への出場自体も困難である状態が続いていることを鑑みると、スポーツ参加をめぐる国際的な二極化構造は依存として深刻であり、また途上国内部においても格差が生じていることが考えられる。障害者スポーツ振興は、個人・集団・社会に障害に関する不平等是正に期待が寄せられているが、実際にどのような影響を及ぼしうるか、また限界性は何か議論したい。